

オフイチャシ跡

—— 測量・試掘調査報告書 ——

中川町教育委員会

平成 24 年 3 月

例 言

1. 本書は、中川町が平成23年に実施した「オフィチヤシ跡」の保存を目的とした測量・試掘調査の報告書である。
2. 本事業は文化庁の文化財関係国庫補助金埋蔵文化財調査事業（町内遺跡）で実施し、調査は平成23年10月22日～11月10日に行われた。
3. 本書の執筆はⅠ-1、2を中川町教育委員会エコミュージアムセンターの疋田吉識、Ⅰ-3、4、5、7、Ⅱを北方先史文化研究所長の氏江敏文、Ⅱ-6を財団法人北海道埋蔵文化財センターの花岡正光、附篇を北海道教育庁文化・スポーツ課の田才雅彦、補篇を北海道開拓記念館の右代啓視、株式会社田宮設計事務所の安田 匡が担当し、各項目の文末に括弧で文責を示した。図版作成および全体の編集は疋田吉識が行った。
4. 本書に使用した写真は有限会社写真事務所CREEK佐藤雅彦による他は、疋田吉識による。
5. 調査並びに報告書作成に際しては次の諸機関及び諸氏にご協力、ご指導をいただいた。（順不同、敬称略）

文化庁、北海道教育庁文化・スポーツ課、北海道開拓記念館、北海道森林管理局上川北部森林管理署、北海道開発局旭川開発建設部名寄河川事務所、浅野啓介（文化庁記念物課）、天方博章（厚真町教育委員会）、石川 誠（士別市教育委員会）、乾 茂年（浜頓別教育委員会）、乾 哲也（厚真町教育委員会）、荻野幸男（厚真町教育委員会）、笠原 興（(財)北海道埋蔵文化財センター）、鎌塚一成、後藤秀彦、齊藤 傑（三浦綾子記念文学館）、齊藤諱一（稚内市教育委員会）、佐藤雄生（松前町教育委員会）、鈴木邦輝（名寄市教育委員会）、鈴木 信（(財)北海道埋蔵文化財センター）、鈴木琢也（北海道開拓記念館）、鈴木 力、瀬川拓郎（旭川市博物館）、関根達人（弘前大学）、千田嘉博（奈良大学）、其田良雄、高島孝宗（オホーツクミュージアムえさし）、塚田直哉（上ノ国町教育委員会）、友田哲弘（旭川市教育委員会）、直江康雄（(財)北海道埋蔵文化財センター）、奈良智法（厚真町教育委員会）、松田敏孝（中川町役場総務課）、水田一彦（士別市立博物館）、森 久大（士別市立博物館）、矢島弘章、吉田清人（名寄市北国博物館）、中山秀隆

6. 本調査には次の者が従事した。

- ・詳細測量委託：かたやま測量株式会社

片山峯輝（測量士）、南 紀親（測量士）、河瀬光秋（測量士補）

- ・事前笹刈委託：上川北部森林組合

今野大樹、久保田雅志、寺田敏明、宮崎 徹

(株)天塩川工業

佐藤伊津美、舟林 緑、菅ひとみ

- ・試掘調査委託：中川町高齢者就労センター

加賀沢敏男、小野寺美代子、酒井吉仁、酒井エツ子、相馬貞子、高橋昭夫、

藁谷和美

- ・試掘補助：舟林祐二、高子 統（中川町教育委員会エコミュージアムセンター）

目 次

例 言

目 次

I 調査の概要	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 遺跡の立地と環境	1
3. 調査の方法	4
4. 測量調査の成果	6
5. 試掘調査の成果	7
6. 火山灰分析	10
7. 遺構	11
II 成果と問題点	15
附 安部志内川右岸遺跡の試掘調査	18
引用参考文献	22
写真図版 1～8	23
補稿 中川町オフィチャシ跡の地質学的な地形条件について	33
報告書抄録	40

I 調査の概要

1. 調査に至る経緯

オフイチャシ跡（登録番号A-01-1）は、昭和50（1975）年に町教委より遺跡発見届がだされている。その後、鈴木邦輝（名寄市教育委員会）による略測図の作成（1976年）および立地に関する考察（鈴木、1985など）がなされているものの、詳細な測量や発掘調査は行われていない。このような状況はオフイチャシ跡に限らず、天塩川水系のチャシ跡全般に共通である。鈴木邦輝が指摘しているように、オフイチャシ跡は天塩川水系最大のチャシであることや河川・交通の要所にあるという立地から、これまで学術的調査の必要性が望まれてきた。

一方、中川町は中川町安川地区の旧佐久中学校をエコミュージウムセンターとして、全面改装し、2002年に開館させた。エコミュージウムセンターは、地域特性・地域財産を地域の魅力として捉え、町全体を博物館とみなし、地域づくりを進めていく「中川エコミュージウム構想」のコア施設である。エコミュージウム構想のなかでも、エコミュージウムセンター近辺のオフイチャシ跡を含む佐久地区および安川地区は自然・歴史・産業遺産・財産が数多く存在するエリアであり、エコミュージウムセンターの周辺の地域遺産・財産の整備を進めつつある。

エコミュージウムセンター内の自然誌博物館には町内のチャシ跡についての展示解説パネルがあり、近年、来館者からオフイチャシ跡の詳細についての質問が多く見受けられるようになってきた。北海道開拓記念館の移動博物館でのオフイチャシ見学（2002年）やエコミュージウムセンターの普及事業、特にササや下草が雪下になる冬期の普及事業「森の学校・冬」では、スノーシューでオフイチャシ跡探訪を行って、チャシについて、またアイヌの自然観について地域の方を講師に招いて実施している。

このように、学術的必要性、地域の歴史的資源、地域の教育的文化資源としてアイヌ民族の歴史遺産であるオフイチャシ跡についての正確かつ詳細な調査が望まれていた。

本事業は、「オフイチャシ跡」の基礎調査（測量・試掘）を行い、調査で得られた学術的情報に基づき、中川町の歴史、北海道の歴史、アイヌ民族の歴史を学ぶための教育的文化資源としての活用を図るために実施された。今後の保全・整備計画については、今回および今後の調査結果に応じて検討を行う。

（正田吉識）

2. 遺跡の立地と環境

オフイチャシ跡は、北部北海道に位置し、中川町佐久付近で西流から北流に転じる天塩川と、北流して天塩川にそそぐ安平志内川との合流地点、安平志内川右岸の南側より突出する舌状丘陵の北端に立地する（図1）。丘陵北端部は国道造成の際に掘削されたが、現存する丘陵先端部から尾根の頂上部分まで約90m、天塩川水面からの比高は約35mある。緯度及び経度は、北緯44°44′10″ 東経142°2′37″であり、中川町佐久の国有林1012林班う小班、1013林班お小班にまたがる（図1、図2）。

チャシ跡の大部分は1012林班う小班内の尾根沿いに位置するが、立木密度が低く、樹齡にギャップが認められる。また、伐根がほとんど認められない等の特徴的な植生が認められる。チャシ跡の植生について以下の可能性が考えられる：

- ・チャシ跡にみられる微地形は伐木・造林作業によるものとは考えづらい。
- ・隣接する林班にはトマツが植林されているが、尾根上のチャシ跡が手つかずになっているこ

とに関しては、その凹凸の微地形の影響があるのかもしれない。また、チャシ跡にミズナラ（推定約300年）のものが2本あるなど巨木が多いが、これらは尾根沿いに「保護樹帯」として天然木を残したのではないかと推定される。

- ・チャシ跡は巨木が多いものの比較的疎林であることは、以前に伐採した可能性がある。ただし伐痕が少ないので伐採したとしてもかなり前の可能性がある。

チャシ跡周辺には概ね南北の走行で中生代白亜紀の佐久層および西知良志内層が分布し、チャシ跡の西側の安平志内川沿いには佐久層の模式地が位置する。メイントレンチの試掘の際、基盤岩の風化帯である第IV層（黄褐色砂岩風化礫層）から白亜紀チューロニアン期（約930～880万年前）の示準化石である二枚貝イノセラムス・テシオエンシス（*Inoceramus teshioensis*）が発見され、チャシ跡の基盤は佐久層であることが確認された。

チャシ跡からは、天塩川の上流・下流が見渡せる。また安平志内川やその支流のルベシベ川も見渡すことができ、川を交通路としたアイヌにとって3本の交通路が見渡せる遠望地として絶好の場所である。安平志内川は「ア・ベシ・ナイ＝我々・沿って下る・川」で雨竜（うりゅう）地方へ越える交通路。ルベシベ川は「ル・ベシ・ベ＝道・沿って下る・もの（川）」で日本海側へ越える交通路である（鈴木，1994）。

天塩川と合流する安平志内川の河口付近には、安部志内川右岸遺跡・安部志内川左岸遺跡があり（図2）、国道工事の際に縄文期の土器や黒曜石製石器等が出土している。そのうち、町内在住の鎌塚一成氏より寄贈された石器3点がエコミュージアムセンターに展示されている。

江戸末期の探検家・松浦武四郎は天塩川流域を踏査した際に、オフイチャシ跡および安平志内川／天塩川に面するコタンについて「丁巳天徳日誌」および「東西蝦夷山川取調図」に記録している。この記録されたチャシ地名「ヲファイチャシナイ」によりオフイチャシは発見された。しかしながら、後に「ヲファイチャシナイ」は「オホイチャシナイ（深い・イチャシ・沢）」という鮭・鱒の産卵床に命名される「イチャシ地名」であり、誤記であったことが指摘された（小林，1980）。このようにオフイチャシ跡は、その発見のきっかけが誤記された幻のチャシ地名であったが、小林（1980）は、「発見の偶然性」だけでなくイチャシとチャシの立地の関係について考察している。

中川町では、オフイチャシ跡のほか、これまで歌内チャシ跡、共和チャシ跡の3つのチャシが確認されている（図1）。オフイチャシ跡から天塩川の下流約19kmには歌内チャシ跡、安平志内川の上流約18kmには共和チャシ跡がそれぞれ位置する（図1）。なお、アベシナイ川は、地図によって「安平志



図1：中川町チャシ位置図

内川」および「安部志内川」の両方の表記が認められる。本報告書は、河川名としては「安平志内川」、遺跡名としては「安部志内川右岸遺跡」、「安部志内川左岸遺跡」として表記している。（疋田吉識）

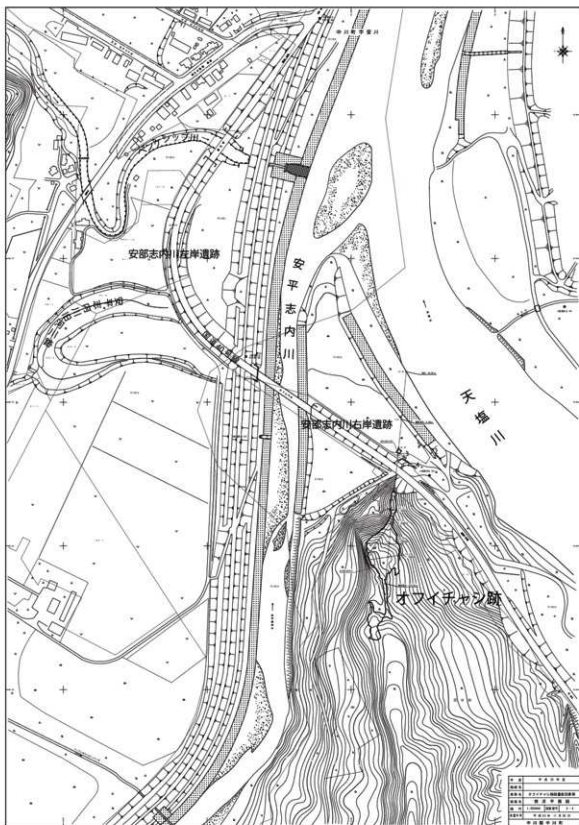


図2：オフイチャシ跡の位置と周辺の遺跡 (S=1:5,000)

3. 調査の方法

経過と目的

「オフイチャシ跡」は1975（昭和50）年に登載され、鈴木邦輝が1979（昭和54）年に略図を公表している（註1；鈴木、1979）。

鈴木氏の近年の解説によると、天塩川流域で7カ所のチャシ跡を確認し、他に3カ所の存在が推測されるといい（註2）、宇田川洋は11カ所の存在を想定している（宇田川、1982）。

これらの多くは現況の確認と略測にとどまっており、詳細測量などは行われていない（註3）。

一方、2005年に未登載の中川町共和チャシ跡で、右代啓視・鈴木琢也他による確認と測量が行われ（註4；右代ほか、2005）、また、幌延町音類堅穴群における北海道教育委員会の重要遺跡確認調査に伴って、サロベツ川流域で3基のチャシが発見され、測量されている（北海道埋蔵文化財センター、2008；2010）。

従って天塩川の流域では、その支流に新たに4基のチャシが追加されるのである。

こうした経過の中でも、当オフイチャシ跡は天塩川流域では特に最大規模のものであり、以前から注目されていたところである。

既に述べられたとおり、当該地は天塩川と安平志内川の合流点に突き出た急崖を伴った丘陵の国有林内にある。丘陵のほぼ全域を太いチシマザサが覆い、見通しも困難な状態であった。

こうした状況下、今回の調査は、より詳細な実態を把握することを目的に、チャシ跡の形態及び遺構の把握のための詳細測量と、遺構の形態・規模及び年代性を確認するための試掘を実施したものである。

（1）事前作業（笹刈り）

チャシ跡全体を覆うチシマザサ等の刈り取りは、後の詳細測量及び試掘のために、丘陵の平坦面から急崖の肩部までを対象に行った。特に20cmコンターの詳細測量を目的としたことから、地表面の微地形を明らかにするべく、入念な刈り払いを行うと共に、葉茎は総て運搬除去して集積した。笹刈り作業は総面積4,000㎡を対象に、上川北部森林組合に委託して実施した。

当該作業は後の詳細測量に大きな便宜を供するところであったが、併せてチャシ跡全体を目視するためにも大きな効果を得る結果となった。

また、試掘調査と並行して中川町高齢者就労センターの協力により、丘陵後背地に続く尾根部の笹刈りも行うことができた。

（2）詳細測量

20cmコンターの詳細測量範囲は笹刈り作業を行った4,000㎡とし、その外側は既存の1/5,000地形図を合成させ、天塩川からチャシ跡奥の尾根まで30,000㎡をカバーする平面図を作成した。

測量は中川町内の「かたやま測量株式会社」に委託し、チャシ跡の丘陵全体をカバーできる最適地に10カ所の基準点を設け、これを基に基本ラインとなる縦断線を設けた。

縦断線は天塩川の河岸に調査起点0.00mを置き、当該調査期間中に実施された「安部志内川右岸遺跡」の試掘調査区を通してチャシ跡の後背地までの調査終点230.00mまでに10m毎の基準点を配して、その全ての座標値と標高の測量が行われた。基本ラインとなる縦断線の起点と終点の測量結果は次のとおりである。

【世界測地系】

起点 0.00m X=81976.234 Y=-16329.927 標高=21.15m

終点 230.00m X=81747.355 Y=-16352.608 標高=72.98m

(平面直角座標系 第12系)

これらを基に対象区域4,000㎡に全測点1,280点を落として基礎データを得た。

また、チャシ跡先端の平坦部から頂上にかけて、各平坦面及び斜面の主要部に3本の横断測量を行った。併せて西側の急崖ラインにはほぼ並行させて、メイン壕の西側コーナーを跨ぎながら、基準ラインに対して斜めの縦断ラインを1本測量した。

測量に使用された機器は、トータルステーションTAJIMA GPT-3105、測量CADはマイソックス(福井コンピュータ) TeamGE02、プリンタはHP Desingjet 1050C、パソコンはDELLコンピュータ Dimension9200C、OPTIPLEX380,GX620である。

成果品には、3、12、19、23頁および巻末の折込のB1サイズ図面に掲載した現況平面図2種、縦断面図1種、横断面4種、3D鳥瞰図2種その他、精度記録表、測量記録簿及び電子データがある。

(3) 試掘調査

「オフイチャシ跡」の試掘は、遺構の形態・規模及び年代性を確認することを目的とした。

試掘は壕No-1に直行させてメインレンチ(長さ15m×幅1m)を設定し、他に丘頂部から各段の平坦部4カ所で各2m×2mのテストピットを掘開した。

なお、テストピット4は、平坦面の肩部につながる土層の状態を把握する為に拡張して4m×2mとした。

レンチ及びテストピットの位置は、各土壌セクションのSP点の座標値と標高測量で確定させた(図3)。

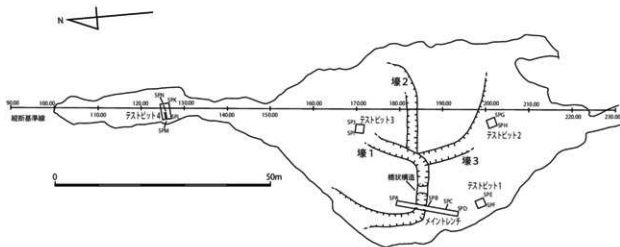


図3：試掘位置と壕

トレンチ及びテストピットの名称、座標値、面積は次のとおりである。

表1 トレンチ、テストピットの名称、座標値、面積一覧表

名称	測点	面積	X座標	Y座標	標高
メイントレンチ	A	15	81799.985	-16368.527	69.26
	B		81792.822	-16370.479	69.62
	C		81788.671	-16371.681	73.91
	D		81785.802	-16372.440	74.54
テストピット1	E	4	81779.833	-16369.652	74.71
	F		81779.178	-16371.565	75.18
テストピット2	G	4	81775.460	-16351.434	68.45
	H		81774.950	-16353.435	68.69
テストピット3	I	4	81807.904	-16351.838	62.06
	J		81807.516	-16349.943	61.83
テストピット4	K	8	81850.335	-16341.024	48.30
	L		81850.131	-16344.757	47.77

尚、試掘調査の終了後は埋め戻しを行い、調査前の現況に復した。

(氏江敏文)

4. 測量調査の成果

チャシ跡主体部を中心として、丘陵上部の平坦面全域に亘る微地形を全て測量し、図面化することができた。

丘陵全体を地形的に概観すると、平面的には縦断150.00mを境に、北側に細長い尾根、南側に膨らんで丘頂までを含む広がりのある斜面、更にその後背地へと続く細い尾根筋に分かれる。

チャシ跡本体はこの両側に細長い尾根筋を持つ、広がりのある面に丘頂と共に存在している。

また、縦断線に沿って断面を見ると、等高線ほぼ5m毎に地形が分かれている。

45m～50mラインには先端部平坦面があり、50m～56mは急斜面、60mラインまでは緩斜面、65mまでは再び急斜面になって70mラインまでの間に主体部がほぼ含まれる。そして急斜面を経て75mの丘頂部へと至っている。

これら平面と断面から総合的には次の様に把握することが可能である(図9、図版1～4)。

I段：丘陵先端の平坦な平場

II段：狭隘な急斜面と上位の緩斜面

III段：チャシ主体部を含む斜面と平坦部

IV段：丘陵の最頂部から後背地にかけての斜面と尾根筋

III段にあるチャシ主体部には3条の壕と、それらに伴う3つの平坦面が存在する。また、壕や平坦面の他にも各段において微細な段差や整地痕と思われる角のある直線的な地形などが確認された。これらについては7項「遺構」で詳しく説明を加える。

(氏江敏文)

5. 試掘調査の成果

・基本層位

試掘の為に配したそれぞれのトレンチ及びテストピットからは、相互間に共通する土層の堆積が認められ、これらが丘陵全体を覆う基本層位として把握できた。

第Ⅰ層：表土（黒色土）

第Ⅱ層：黒褐色～茶褐色土（風化砂岩礫混じり）

第Ⅲ層：褐色～黄褐色土（風化砂岩礫を多量に含む）

第Ⅳ層：黄褐色砂岩風化礫層（佐久層）

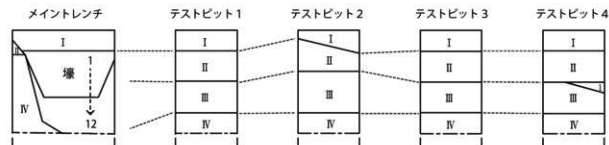


図4：発掘区の基本層位模式図

チャシ主体部のメイン塚にかけて設定したメイントレンチでは、基本層位の第Ⅱ層から第Ⅳ層までの間に、塚の構築時やその後における崩落土が複雑に堆積しており、1から12に分層される。

テストピット4においては第Ⅱ層と第Ⅲ層の間に、それらを削平して平坦面を形成したと見られる堆積土層（1層）が確認された。図4にこれら相互の関連を模式図で示しておく。

各発掘区の状況は次のとおりである。（図5～図6 図版5～7）

・メイントレンチ

主体部となる塚1を通して、内側の平坦面（SPA）から丘頂部（SPD）にかけて設定した、トレンチ全体での基本層位は共通である。塚の覆土は第Ⅱ層から第Ⅳ層にかけて複雑な堆積が認められ、1から12に分層できる。SPB～SPC間は急激な傾斜になって落ち込んでおり、薄い第Ⅰ層の下位は9の斜面崩落土になっている。平坦部の第Ⅳ層には階段状の亀裂が入っている。平坦部は全体に丸みを帯びて、明瞭な平坦部分は約20㎡である。トレンチは平坦部中央の最高位から僅かに東に偏っているものの、セクション面には明瞭な掘上土は認められず、上位は基本層位の第Ⅰ層と第Ⅱ層が堆積している。

塚の覆土4層下部から火山灰層（5）が検出された。

平坦部の肩部において、上面で幅35.0cm、深さ15.0cmの溝が塚に沿う形で検出された。

・テストピット-1

丘頂部の最も高位置に設定したが、特別な遺構や遺物は検出されなかった。地表面はSPF→SPEにかけて緩やかに傾斜している。土層は単純な堆積になっており、第Ⅱ層は傾斜と共に薄くなっている。SPF付近の第Ⅲ層は平坦で薄く、第Ⅳ層に接する傾向にある。

・テストピット-2

東側の平坦部5のほぼ中央に設定したが、ここにおいても特別な遺構や遺物は検出されなかった。土層はここでも単純な堆積になっている。第Ⅲ層は地表面の傾斜よりも平らでSPGに向かって厚くなっている。

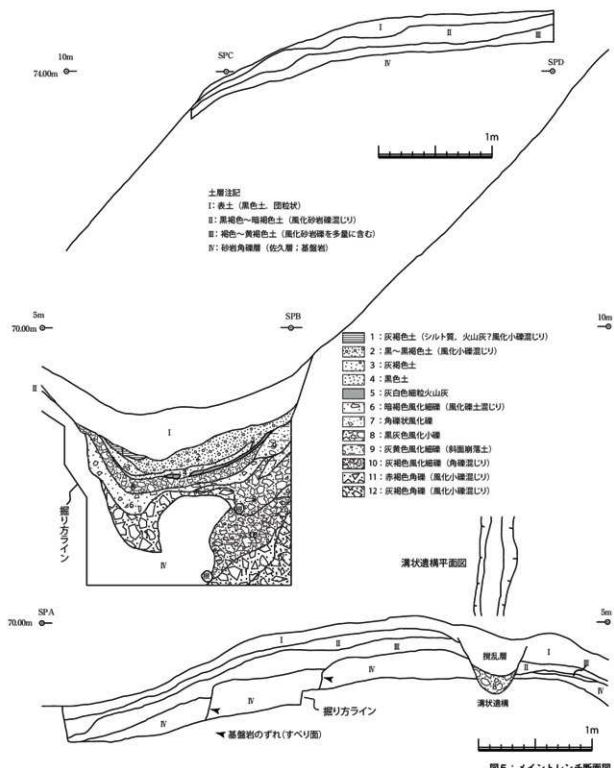


図5：メイトレンチ断面図

・テストピット-3

等高線の走りが示すように、壕1の開口部が僅かに識別できる位置の、傾斜がやや緩やかになる丘陵第Ⅲ段のほぼ中央部に設定した。遺物等の滞留を期待したが特別なものは検出されなかった。各層とも地表面の傾斜に沿った堆積になっている。

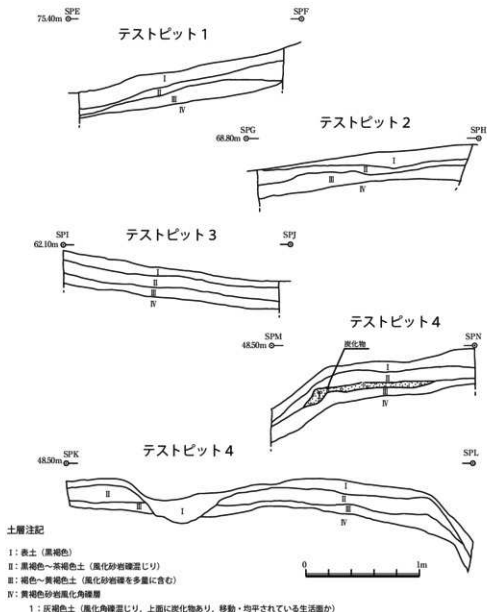


図6：テストピット断面図

・テストピット-4

丘陵先端の第Ⅰ段の平坦部に設定した。地表面で既に確認されていた窪みの性質と共に平坦部の肩部の状態確認を目的とした。窪みの覆土には基本層の第Ⅰ層が堆積していたことから現代のものと判断できた。ここにおいても基本層位は他と同様である。SPM～SPNラインの第Ⅱ層と第Ⅲ層間に両者が混じりあった風化小礫を含む灰褐色土層（Ⅰ層）が存在している。この層は西側の肩にかけて第Ⅲ層の上面とほぼ水平となり、地表面からも視認できる直線的で明瞭な肩部のラインを形成している。このⅠ層の上面の肩部付近から炭化物（1cm×5cm）が貼り付いた状態で検出され、サンプルを採取してある。

(氏江敏文)

6. 火山灰分析

中川町のオフイチヤシ跡から見いだされた火山灰について岩石記載学的特徴を明らかにし、既知のテフラとの対比を行なった。その結果、樽前山起源のTa-a (AD. 1739) (北海道火山灰命名委員会, 1979) に対比された。

1) 火山灰の野外観察

産状：降下堆積物。壕の底の上方約1cmに、層状で断続的に産出。壕の底面に平行的に産出し、堆積時の原位置をほぼ保っていると考えられる。

層厚：1 cm。

色調：10YR 6/3 (にぶい黄橙)。地質断面では白く見える。

表2 火山ガラスの化学組成 (重量%, 100%規格化平均値)

試料名	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	NaO	K ₂ O	合計 (測定値合計)	測定数
オフイチヤシ跡火山灰 (本報告)	77.33	0.38	12.28	1.83	0.11	0.27	1.67	3.65	2.48	100.00	24
天寧1 Ta-a上部	76.10	0.44	12.93	2.26	0.05	0.34	2.06	3.49	2.33	100.00	10
天寧1 Ta-a下部	76.00	0.45	12.99	2.18	0.05	0.31	2.02	3.55	2.44	100.00	10
ツベットウンチャシ跡 Ta-a	76.80	0.36	12.66	2.10	0.10	0.39	1.83	3.22	2.56	100.00	20

FeO*:全鉄

2) 火山灰の検鏡

粒度：シルトサイズが主体。粒径0.5mm以下の砂サイズ粒子も含む。

鉱物組み合わせ：斜長石と火山ガラスに富む。斜長石、火山ガラス) 斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物。火山ガラスの形態は軽石型、スポンジ状発泡の軽石型) 繊維状発泡の軽石型。シルトサイズの火山ガラスではバブルウォール型も多い。

3) 火山ガラスの分析

分析装置：日本電子製の走査型電子顕微鏡JSM-5600LV、EDS型X線マイクロアナライザED-2200。
分析条件：加速電圧15kV、照射電流0.35nA、測定時間100秒(ライブタイム)、測定面積約5μm四方、ZAF補正によりSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, Kを定量。

分析結果：表2、図7、図8に示す。

4) 対比

表1、図7、図8に、給源から遠方で見いだされた樽前山Ta-aテフラの火山ガラス化学組成 (花園, 2008, 2009) を示す。天寧1遺跡は釧路町天寧に、ツベットウンチャシ跡は津別町共和に位置している。本遺跡の火山灰の火山ガラス化学組成は、上記両地点のTa-aと調和的である。

平均化学組成には有意な差は認められず、TiO₂-K₂O図上では良い一致を示す。また、鉱物組み合わせと火山ガラスの形態 (花園, 2008, 2009; 古川・七山, 2006) は一致する。さらに、Ta-aの分布域は、給源から北東方向を主軸としながらも北～北北東域をも含んでいるしたがって、本遺跡の火山灰は歴史時代の噴出物であることから、Ta-aに対比されると考えられる。(北海道火山灰命名委員会, 1979; 古川・七山, 2006)。

5) まとめ

本遺跡の火山灰を、鉱物組み合わせとその量比、火山ガラスの形態、火山ガラスの化学組成、分布域、層位から樽前山起源のTa-a(AD.1739)に対比した。(花園正光)

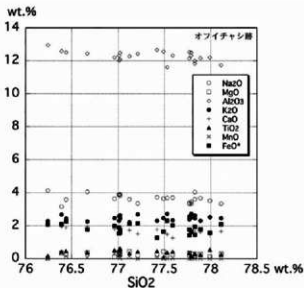


図7：火山ガラスの化学組成分布

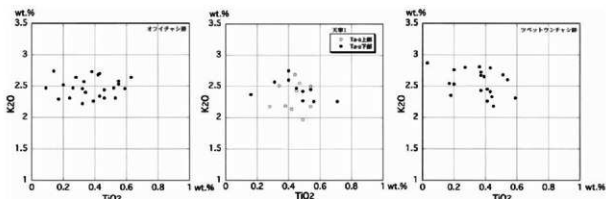


図8:火山ガラスのTiO₂-K₂O 分相オフイチャシ群テフラ,天草1Ta-a テフラ,ツベツトウンチャシ群 Ta-a テフラ

7. 遺 構

壕 1 (「橋状遺構」・地滑り地形)

標高65.0mから69.0mにかけて存在する。平面形状は北側に開いた馬蹄形を呈している。延長35.0m、幅3.0m、深さ1.5m、掘込面積105.0m²である。床底の形状はやや平坦で、中央部に低い「土橋遺構」が1本ある。

壕の南側は丘頂からの急斜面に接しており、壕の西側外縁には掘上土による土塁状の高まりが丘頂から崖面沿いに存在する。壕の西側開口部は平坦のまま崖面に続いている。東側の開口部は徐々に浅くなって斜面の中央に続いている。

壕に囲まれた内側全体はドーム状の高まりになっており、最頂部も完全な平坦ではなく面積は約20.0m²である。

壕は分層した6層を壁から底部にかけて逆台形状に掘込まれている(図5、図版7)。6層も斜面崩落土の一つで、下部は凹凸が著しい。底面直上の覆土は8層で、底面下位にある黒褐色風化小礫層が時間的隔たりをもって崩落堆積したものである。この7層の上に火山灰層が薄く堆積していることから、壕の構築はこの火山灰の降灰以前であることが明白である。

基本層位は現況の床底には第Ⅰ層が厚く堆積しており、第Ⅱ・第Ⅲ層は確認出来ない。壕の内側肩部斜面までは第Ⅱ層が薄く存在することから、第Ⅱ層ないし第Ⅲ層の境目あたりから掘り込まれている可能性が考えられる。

深掘では基盤層の第Ⅳ層が盛り上がるように堆積しているが、地滑り等で形成された亀裂の可能性が高い(註5)。即ち、壕はこの地滑りで出来た大きな亀裂を利用して築造されたものと考えられる。

壕 2

標高64.0mから67.0mにかけ、壕1に接してほぼ東側に直線的に伸びている。延長15.0m、幅3.5m、深さ1.5m、掘込面積52.5m²である。床底の形状はやや平坦で、壕の東端は僅かに湾曲しながら丘陵の急斜面に続いている。壕の北側には壕に沿って掘上土による幅1.5m長さ9.0mの土塁状の高まりが存在する。平坦面は形成されていない。

壕 3

標高65.0mから69.2mにかけ、壕1に接してほぼ南東に向かって湾曲して存在する。延長10.0m、幅3.5m、深さ1.5m、掘込面積35.0m²である。床底の形状は平坦さを欠いており、掘り方も他の壕よりは不明瞭である。壕は中程で東に湾曲しており、そのまま不明瞭ながら丘陵の急斜面に続いている。壕を挟んだ北側には丸みを帯びた一段小高い平坦面と、南側には均平な平坦面が存在している。

平坦面

丘陵の最先端から丘頂を越えた130.00m間において、規模や形状は一定ではないが明瞭な面が存在している。これら全てが人工的なものであるとは考えられないが、それぞれの縁辺には直線的な角を持った地形や微細な段差が確認できる。急峻な丘陵の上においては、少なからずこれらを無視することは出来ない。よってこれらを当遺跡における「平坦面」として捉えておくものである。

・平坦面1

丘陵の最先端、標高48.0m～49.0mにある。規模は長軸13.0m短軸3.5m面積約45.5㎡である。北側先端は多少緩やかに傾斜して麓に続くが、東西側は急崖になっている。西側の肩は直線的な角のある地形が地表からも見られ、テストピットの土壌セクションからも削平された可能性が高い。この平坦面の南側は幅の狭い「馬の背状」になって、狭く急な斜面を経て上段の平坦面2へ続く。

・平坦面2

標高57.0m～59.0mにかけて緩やかな斜面になっている。規模は長軸12.0m短軸6.0m面積約72.0㎡である。東側に低い尾根筋が南北に通っているが、この尾根筋の西側にある浅い低地が上段にある塚1の東側開口部へと続いている。また、西側の崖縁は均平な斜面になっており、角のついた直線的な地形が存在する。地滑り痕を越えた延長線上の塚1の西側開口部へと続いていた可能性も考えられる。

・平坦面3

塚1に囲まれた内側、標高69.0m～70.0mにかけて存在する。ドーム状高まりの上部に長軸5.0m短軸4.0m面積約20.0㎡ほどの小さな平坦面があるが、完全な平面にはなっていない。主体部の中にあつて明らかに塚に囲まれているが、全周は全て急斜面になっている。

・平坦面4

塚2と塚3の間、標高69.0m～69.8mにかけて存在する。規模は長軸12.0m短軸5.0m面積約60.0㎡である。全体的になだらかなドーム状を呈しており、東側の急崖へ傾斜を増しながら続いている。急崖との境の肩部には角のついた直線的な地形が20mに亘って存在している。北側は塚2の急斜面に接している。

・平坦面5

塚3の南側の一段低い標高68.2m～68.6mにかけて存在する。規模は長軸10.0m短軸6.0m面積約60.0㎡である。他の平坦面に比較すると唯一フラットな面を持ち、塚3の開口部に続いている。東側の急崖へ傾斜を増しながら続いているが、傾斜になる地形の変換ライン並びに急崖との境界付近には僅かな段差が認められる。

・平坦面6

丘頂平坦面で、標高74.4m～75.0mにかけて存在する。規模は長軸14.0m短軸3.0m面積約42.0㎡である。北側は塚1の急斜面に接し、東側は塚3と平坦面5に向かって均一な面で斜面を形成している。南側は「馬の背状」の狭い鞍部を経て、狭い尾根筋で後背地へと続いている。西側は直接的に丘陵の急崖になっており、眼下には天塩川の支流の安平志内川の流路が見渡せる。

溝状遺構

メイトレンチのSP点A→SP点Bに向かって3m80cmの位置に塚の肩部に沿って幅35.0cm深さ15.0cmの溝が検出された(図5、図版6)。

発掘開始時点において既に第I層から極めて柔らかい黒色土層の存在が確認されていたが、球果や葉、糞塊が詰まっており小動物の巣穴と判断されていた。巣穴は溝に沿って第IV層中まで斜めに掘ら

れていた。従って溝の掘込面や溝壁の上部は攪乱されていて判然としない。

攪乱部分下位の溝の覆土には壕内における分層の8層が硬く堆積していることから、壕と一体的存在と考えられる。(図10)

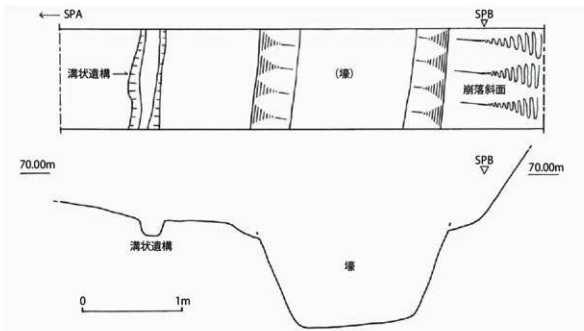


図10：溝状遺構と壕（壕の平面図は図上復元）。

段差・整地痕

各平坦面や急崖の肩部に僅かな段差や角を持った直線的な地形が存在している。これらは整地など、少なからず人工的な可能性を考慮しておく必要がある。

段差は壕2北側斜面の下方に10cmほどの高低差で3カ所と平坦面5の地形変換部に1カ所、急崖手前1カ所が、それぞれ同様な高低差で存在している。これらは必ずしも等高線では表れてこない程度のものであるが、低い視線での見通しでは充分確認ができる。排土の滞留または整地によって形成された肩の部分の可能性が考えられる。

直線的な地形は平坦面1の西側に6.0m、平坦面2の西端に6.0m、平坦面4の東端に20.0mがそれぞれ存在している。(氏江敏文)

II 成果と課題

これまで天塩川の主流筋筋に於けるチャシについては、智恵文チャシを除いて詳しい測量も行われていなかった。こうした中において、今回の調査そのものの意義は極めて大きなものがあった。

以下、その成果を整理し、そこから派生してくる幾つかの課題についても列挙してまとめとする：

詳細測量調査

1. 丘陵全体の地形が明らかになったと共に、それぞれの構成面の特徴を掴むことが出来た。従来は丘先式のチャシとして認識されて来たが(註6)、主体部は丘頂周辺にあって、丘頂式に近い形状とも言える。壕の形状や斜面利用から見ると、浜中町のセンボウシ2チャシ跡やシリシズ1～4チャシ跡の立地に類似している(北海道チャシ学会、1985)。

2. 3本の壕の存在と、それらに絡む平坦面の特徴が明らかになった。既に鈴木は1979年に今回確認された壕1と共に壕3が存在する可能性を示す略図を公表していた。今回の詳細測量では壕1に接して新たに壕2の存在と、鈴木が示した壕3の形状を明らかにすることが出来た。

平坦面3及び4はドーム状の高まりになっていて、完全な平面にはなっていない。壕に接するものの中では、平坦面5が唯一均一な平面で存在している。

3. 丘陵全体を活用し、肩部には部分的な整地が行われている可能性を掴むことができた。丘陵の地形構成は大きくIからIV段に分かれる。壕や土塁は丘陵の第Ⅲ段に集中しているが、第I段にある平坦面1、第Ⅱ段の平坦面2、第Ⅲ段の東端には、それぞれ整地等によると思われる角のある直線的な地形の存在が確認された。

4. 壕は地滑り地形の亀裂を利用して構築された可能性が高い。従って壕1の中央にある「橋状遺構」は壕の構築時に新たに敷設された可能性がある。

試掘調査

1. 壕1の覆土から検出された火山灰(5層)は、別篇で花園正光が詳しく報告しているとおり1739年降灰の樽前aと同定され、壕の構築年代がそれ以前であることが判明した。

2. メイントレンチで、壕1に並行して、第Ⅳ層まで掘り込まれる溝状遺構を検出し、壕に付随する遺構であることを確認した。柱穴などは確認されなかったがこの溝は壕の肩に沿って巡る可能性がある。

3. 平坦面1に設定したテストピット壁の観察から、西端肩部の角のある直線的な地形は、基本層の第Ⅱ層を削平して均平化した整地痕の可能性が高い。第Ⅱ層と第Ⅲ層間にはそれらの行為に伴うと見られる別な層が堆積しており(1層)、上面は平坦になっているが下面は第Ⅲ層の凹凸面に沿って堆積しているものである。この1層の上面と第Ⅱ層との間に炭化物が挟まっており、サンプルを採取してある。

4. メイントレンチ並びに各テストピットからは遺物は出土していない。

5. メイントレンチの発掘からも、壕は地滑り地形の亀裂を利用して構築された可能性を知ることができた。壕の内側の高まり斜面の第Ⅳ層には亀裂に伴う階段状のズレが生じており、特に亀裂周辺は脆くなっている。高まり全体の地すべりが、更に小さな亀裂を生じさせた結果と目されるものである。メイントレンチ内においては壕からの明らかな掘上土は確認できなかった。

以上は詳細測量調査と試掘調査の結果である。これらからは更に幾つかの課題が提起される。

課題

第1点目は本オファイチャシ跡の形状の捉え方である。丘先式チャシの一般的な形は「岬や丘の一端を弧状の溝をもって区切ったもの・」であるが、本チャシ跡の主体部は、丘陵の先端に向けた斜面の最上部に弧状の壕と共に2本の壕が構築されている。丘先式と丘頂式の複合形とも言える。

次にこれら3本の壕の形成であるが、壕はそれぞれならだかに斜面や急崖の肩部まで伸びている。これらの構築の時間差については現段階では厳密には分からない。3本が接する部分での観察では等高線にも表れているとおり、それぞれに段差がある。この段差が構築の時間的差を示唆しているようにも見える。それぞれが接する部分の壕の底面では壕1が最も低く壕3が最も高いが、壕3→壕1なのかその逆かについては今後の検証が必要となってくる。

次に各平坦面についてであるが、平坦面1、2、4の肩部にある角のついた直線的な地形は、均平化の可能性を考慮することが出来る。しかしこれは丘陵のごく一部分であって、台地の大幅な改変にまでは至っていない。だが反面、丘陵の頂上部に主体部があることから見れば、こうした自然地形とも思われる各平坦面が全く意味を持たないで存在しているとは考えにくい。そしてまた壕1の内側にあるドーム状の狭い平坦面3は、防衛や戦闘機能を有しているとは考え難い様態である。丘頂にある平坦面6との関連の中では「祭場」のような機能を優先的に考える方が合理的に思える。そのことは壕1のほぼ中央にある「橋状遺構」の状況からも考えることができそうである。

この「橋状遺構」は壕内に低く設けられており、外側の斜面に接している。この斜面は急峻で梯子等の設備なくしては上の段に上がることは容易ではない。段の上は更に平坦面6からの斜面が続いており、有事における迅速な行動には適していない様態にある。

「橋状遺構」に関しては後藤秀彦の論考がある（後藤、1980）。本オファイチャシ跡のこうした形状は後藤の「ruika-B」に相当するが、設置されている位置と地形の様態からは機能そのものを改めて考えてみる必要があるかも知れない。

チャシが「聖域」や「祭場」としての機能も有することについては、既に河野広道が網走の例を指摘し（河野、1958）、その後知里真志保によっても伝承の中の事例が大きく取り上げられてきた（知里、1973）。近年に至っては宇田川洋（宇田川、1988）、後藤秀彦（後藤、1984）、豊原照司（豊原、1994）、田才雅彦（田才、1993、2010）らの論考がある。

そうした観点から本オファイチャシ跡の「橋状遺構」を見る時、このような遺構は例えば祭事等における「神々が往来する道」など、信仰上の機能を有していた可能性を新たに考えて見る必要があるかも知れない。しかしまた、このことを考古学的に立証するには限界があることも事実である。

次に榎前a火山灰によって1739年以前に壕が構築されたことが明らかになった。相対年代を知るための一つの指標として大きな意味を持つものであるが、絶対年代を特定できるデータは得られていない。また、メイントレンチの発掘でも掘込面の層位は完全には把握できなかった。大まかには基本層位の第Ⅱ層中からの可能性が高いと目されるが、今後の大きな課題である。

そしてまた、各テストピットにおいては特別な遺構の検出には至らなかった。

今後においてはメイントレンチの壕1の肩部にある溝状遺構の詳しい性格、他の構築物跡の検出、丘陵の麓から中間斜面の検討などで、本チャシ跡の具体的構造が明らかになるであろうし、絶対年代の特定も期待したいところである。

そして更に大きな課題としては、このチャシ跡を担った人々のコタンの位置や本チャシ跡と天塩川流域にある他のチャシ跡との関係や役割、北海道内での位置づけ、下流の天塩町から幌延町にかけて存在する大規模な縄文文化遺跡との関係、ひいてはサハリンや大陸を含めた北方史の中での位置づけ

など、総合的な検討が必要となってくる。つまりは「アイヌ民族史」の観点からの検証が求められるものでもある。(氏江敏文)

註

1. オフィチャシについて鈴木は「道北地方のチャシ」『名寄叢書 第3巻』1979の中で、昭和48年に発見され、三面の平坦地がある事、「コ」の字状にめぐる壕と、壕端の東から別な壕状の落ち込みが半円状に南側に続いていることを略測図と共にはじめて明らかにした。
2. 『新名寄市史 第1巻』1999、『音威子府村史 上巻』2007等で解説している。
3. 北海道教育委員会が1975年に智恵文チャシコツを2000:1, 1mコンターでの現況地形測量を行っている。
4. 報告によると既に大部分は破壊されているが、壕の一部と築造当時の平坦面が僅かに残存している。
5. 調査期間の11月7日に安田 匡氏（博士 現在：株式会社田宮設計事務所 札幌市）に丘陵全体の地形について地質学的見地からの調査協力を頂いた。安田氏によると、佐久周辺の丘陵は基盤層の佐久層が脆く、随所に当該地のような地滑り地形が多く見られ、丘頂平坦面6→4、同じく6→3、平坦面4→壕2個へと一連の地すべりによる地形であり、それぞれの頂部間の高低差や土量は物理的にも見合うことを指摘頂いた。
6. 註1に同じ。

附編 安部志内川右岸遺跡の試掘調査

1. 調査に至る経緯

本遺跡は、昭和59年に実施した北海道教育委員会の「一般分布調査」時に、本項執筆者の田才が現地調査を行い、国道工事の際に土器等が出土しているという情報を得て、対岸の安部志内川左岸遺跡と共に登録手続きをとった。

その後は、国道40号を挟んで牧草地と原野として保存されてきたが、平成22年10月に、北海道開発局旭川開発建設部が天塩川河道掘削に関連する工事用地として使用したいとして、埋蔵文化財保護のための事前協議書を提出した。

同月、北海道教育委員会が改めて両遺跡の「所在調査」を実施し、いずれも「試掘調査」が必要と回答した。

「試掘調査」は翌年6月に行い、左岸遺跡では若干の炭化物分布範囲を認めたものの、江戸時代以前に溯る遺物は確認できず、「着工可」と回答した。

本遺跡では、「もの送り場遺構」の可能性がある炭化物集中範囲を確認したため、その地点周辺について、牧草の収穫が終わる10月に「再試掘調査」を行うこととした。

本項は、この試掘調査の内容である。

2. 遺跡の立地と環境（図2）

遺跡は、天塩川とその支流である安平志内川の合流点に突き出す河岸段丘上に位置し、その段丘後背の尾根上に、オフイチャシ跡が位置している。

天塩川・安平志内川とも、現在は改修されて北流しているが、いずれも大きく蛇行の跡を残しており、オフイチャシ跡からは、いわゆる「モイ地形」（註）を東西両側に見下ろす形になっている。

オフイチャシ跡から天塩川の川面に至る間に、何段もの細かい段丘面が構成されており、遺跡は、縄文時代からアイヌ文化期まで、それぞれの時期、それぞれの面に残されているものとみられる。

しかし、本遺跡は北・東・西の三面が川に面しており、南はすぐに尾根が迫っているため、定住的な環境に恵まれているとは言いにくい。

本編で記されているとおり、左岸遺跡にコタンがあったことが武四郎の記述や古写真（中川町史：安平志内河口コタンのアイヌ）でわかっているが、本遺跡についての記録はない。

3. 試掘調査の方法

6月に実施した両遺跡の試掘調査は、バックホウを用いて20m間隔で掘開する方法で行い、1.4×5mほどのトレンチを左岸遺跡で16カ所、本遺跡で25カ所設定した。

10月に実施した本遺跡の再試掘調査は、前回の試掘調査で確認した「もの送り場遺構」の範囲確認を目的に、遺構部分に5×5mのグリッドを設定した（図11）。

また、遺跡の広がりを確認するため、遺構上流側の同一面に2カ所（図2の1・2）と、オフイチャシ跡側の一段高い小テラス（同3）及び更にその上のテラス（同4）に各1カ所、1.4×5mほどのトレンチを設定した。

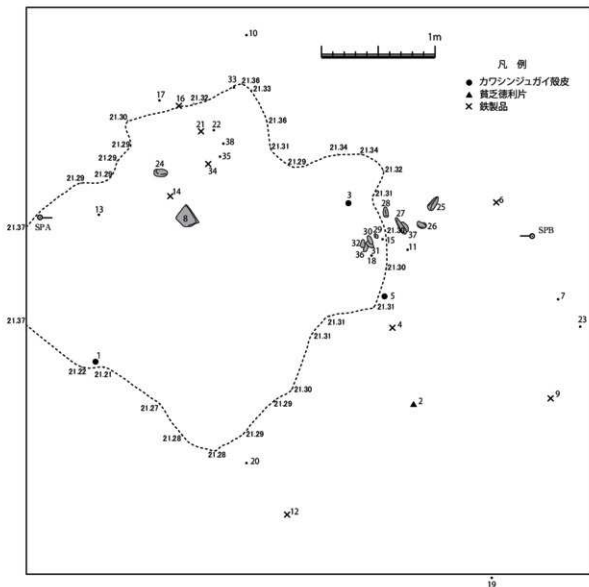
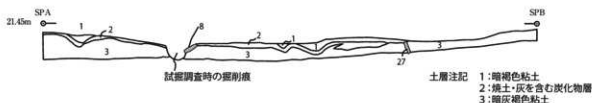


図 11：安部志内川右岸遺跡「もの送り場遺構」

4. 土層

以下のように両遺跡共通の層名を付した。

0層：盛土(砂利混土)。両遺跡とも部分的に見られる、河川改修に伴う工事用道路やヤードの痕跡と思われ、コンクリート塊が投げ込まれている地点もあった。

I層：耕作土。本遺跡は、採草地として使用されており、20～50cmの層厚がある。

左岸遺跡は耕作放棄地で、表土の厚さが5～10cmと削られて薄くなっている。

II a層：青灰色粘土。II a層とII b層が2セット見られる地点もある。

II b層：灰褐色粘土。本遺跡の「もの送り場遺構」は、本層上面で検出している。

左岸遺跡では、本層上面と下面で各1カ所、若干の炭化物分布範囲を認めた。また、馬蹄を半分に割ったような鉄製品1点が本層から出土している。

Ⅲ a 層：黄灰色シルト。本遺跡では、ほぼ全面に分布。左岸遺跡では殆ど認められない。

Ⅲ b 層：青灰色シルト。同上。

Ⅳ a 層：灰色細砂。Ⅳ a・bとⅤ層は両遺跡に分布。

Ⅳ b 層：黒灰色粗砂。

Ⅴ層：礫層。

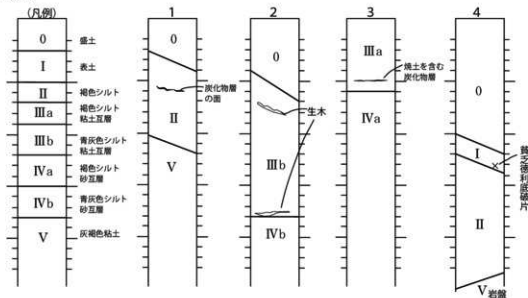


図 12：安部志内川右岸遺跡土層図

5. 成果と問題点

再調査のトレンチ 1Ⅱ b 層中で炭化物層の面（地表面から60cm下位）を、トレンチ 3のⅢ a 層中で焼土を含む炭化物層の面（地表面から50cm下位）を確認し、トレンチ 4でも貧乏徳利の底部片が出土したことから、国道際の河川敷地一杯まで、遺跡の範囲が広がっていることが判明した。

その結果、旭川開発建設部の同意を得て、今後の河川工事に際しては、「もの送り場遺構」周辺から上流側の河川敷地を工事区域から除外し、現状保存していただけることとなった（図 2）。

また、「もの送り場遺構」の範囲を確認し、平面図・土層断面図（図 11、12）を作成した。遺構は現地表面から40cmほど下、Ⅱ b 層（図 12の3層）の上面で、南北約3.2m、東西3.1m×aの範囲に広がる焼土・炭化物まじりの層として捉えられた。

断面確認のため、SPA—SPB間の北側に幅20センチのトレンチを入れた。遺構の厚さは2～3cmで、小さな焼骨片をまばらに含んでいる。

また、遺構の西端付近で小礫の集中を確認し、一部は遺構外にも広がっていたため、その範囲については調査を行った。

その他の部分については、遺構の範囲を確認するに止め、遺構全体を掘り上げてはいない。

遺構及びその周辺の出土遺物は、カワシンジュガイ殻皮が3点、貧乏徳利片が1点、長さ2～6cmの棒状鉄製品が6点、コイル状鉄製品が2点、透明感のある青色のガラス玉2点（外径0.70×0.57cmと0.79×0.44cm）、鮮やかな赤漆の膜片（0.63×0.55cm）1点、板状礫2点、火打ち石と思われる珪化岩やピッチストーンの欠けた礫5点、楕円形の礫・方割礫（長さ2.1～13.5cm）15点、炭化材片1点

がある(表3、図版8)。

こうした遺物のあり方は、ダム事業に伴って調査例が増加している厚真町内の遺跡でも確認されている。ニタツナイ遺跡(奈良智法 2009)では、樽前b (Ta-b)火山灰の降灰直下で確認された遺物集中1 (ⅢB-01)で、2.4×1.5mほどの範囲から、漆膜片、銚子・鉄鍋などの金属製品片、火打ち石、小礫などが出土しており、調査者は「もの送りの可能性が高い」としている。

本遺構も、そうした「もの可能性が高い」ものとして、「もの送り場遺構」の名称を付している。

ただし、秋野茂樹(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構)によれば、アイヌが「もの送り」をする場合、カワシンジユガイのように日常的に大量に取れるものや、別種のを一緒に「送る」ということはないで、本遺構のような遺物の出土状況は、一時的な「送り場」ではなく、例えばヌササンが一杯になったときに、その場にあるものをもっていく「納めの場」というものがあるので、そうした場所である可能性が高いのではないかと、このことであった。(田才雅彦)

- (註) モイ地形：波の穏やかな海の入り江や、河川が大きく蛇行して流れが緩やかになっている地点。河床が砂礫質で湧水のあるモイは、サケマス類の産卵場となることが多いため、遡上するサケマス類の確認を、チャシ構築の目的と考える説もある。

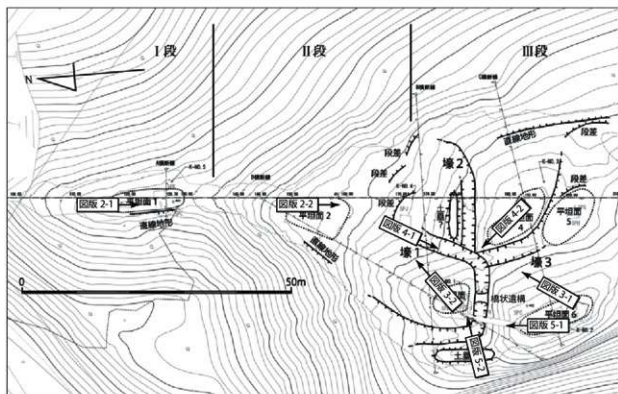
引用文献（著者アルファベット順）

- 知里真志保, 1973, 「ユーカラの人々とその生活-北海道の先史時代人の生活に関する文化的考察-」
『知里真志保著作集 3 生活誌・民族学編』平凡社。
- 古川竜太・七山太, 2006, 北海道東部太平洋沿岸域における完新世の降下火砕堆積物。火山, 51巻,
351-371
- 後藤秀彦, 1980, チャシの橋状遺構について, 浦幌町郷土博物館報告, 16.
- 花岡正光, 2008, 天寧1遺跡の火山灰, 「鋼路町天寧1遺跡」,(財)北海道埋蔵文化財センター,
355p. 305-310.
- 花岡正光, 2009, ツベトウンチャシ跡の火山灰の対比, 「ツベトウンチャシ跡一平成20年度試掘調査報告書」,北海道津別町教育委員会,50p,29-30.
- 北海道チャシ学会, 1985, 『北海道のチャシ集成図』I (道東北篇),
北海道火山灰命名委員会, 1979, 「北海道の火山灰分布図」,
北海道埋蔵文化財センター, 2008, 「幌延町音類堅穴群」重要遺跡確認調査報告書 第6集
北海道埋蔵文化財センター, 2010, 「幌延町豊富町音類堅穴群」重要遺跡確認調査報告書 第7集,
小林和夫, 1980, 北海道のチャシ地名, 「日本城郭大系 1 北海道・沖縄の城郭」児玉幸多・坪井清足
監修, 新人物往来社, 345p.
- 河野広道, 1958, 「網走市史」上巻 網走市
- 後藤秀彦, 1984, 北海道のチャシ, 「北海道の研究 第2巻 考古篇Ⅱ」清文堂。
- 鈴木邦輝, 1979, 「道北地方のチャシ・名寄叢書 第3巻」市立名寄図書館
- 鈴木邦輝, 1994 「天塩川流域のチャシ立地試論」『アイヌのチャシとその世界』北海道チャシ学会編。
- 田才雅彦, 1993, チャシ(chasi), 「先史学と関連諸科学-吉崎昌一先生還暦記念論集-」吉崎昌一先生
還暦記念論集刊行会。
- 田才雅彦, 2010, チャシ(casi)2, 「比較考古学の新天地」菊池徹夫編 同成社。
- 豊原照司, 1994, チャシとその性格, 「アイヌのチャシとその世界」所収 北海道チャシ学会編 北
海道出版企画センター。
- 右代啓視・鈴木琢也・松田敏孝・矢島弘章, 2005, 中川町共和チャシの地形測量調査報告, 自然誌の
研究 第7号, 中川町自然誌博物館。
- 宇田川洋, 1982, 天塩川筋のチャシコフの分布, 北方科学調査報告3, 筑波大学。
- 宇田川洋, 1988, 「アイヌ文化成立史」北海道出版企画センター。

参考文献

- 「北海道のチャシ」1983 北海道文化財保護協会。
- 「新名寄市史 第1巻」1999 名寄市。
- 「音威子府村史 上巻」2007 音威子府村。
- 徳井由美, 1990, 八千代A遺跡におけるテフラ層の分析, 「帯広・八千代A遺跡本文編」,北海道帯広市
教育委員会,100p,65-72.
- 町田洋・新井房夫, 2003, 「新編火山灰アトラス-日本列島とその周辺」,336p.
- 奈良智法, 2009, 「厚真町 ニタツブナイ遺跡」厚真町教育委員会, 114p. .

図版 1～8



上図：図版写真の撮影方向



上図：測量結果をもとに作成したオファイチャシ跡の3D鳥瞰図（左；植生などを再現したもの）

図版 1



1. 安平志内川左岸堤防上からのオフイチャシ跡遠景。(撮影；佐藤雅彦)



2. 安平志内川左岸堤防上（東側）からオフイチャシ跡。(撮影；佐藤雅彦)



1. 平坦面1から平坦面2を見上げる。手前はテストピット4。(撮影；佐藤雅彦)



2. 平坦面2から平坦面3および塚を見上げる。(撮影；佐藤雅彦)

図版 3



1. 平坦面 6 から平坦面 3, 4 および壕を見下ろす。左上はメイントレンチ。(撮影; 佐藤雅彦)



2. 平坦面 3 から平坦面 2 および壕を見下ろす。中央はテストピット 3。(撮影; 佐藤雅彦)



1. 壕1下から平坦面6を見上げる。中央が壕1、壕2、壕3の接点。（撮影；佐藤雅彦）



2. 平坦面4より見た壕1、壕2、壕3の接点。（撮影；佐藤雅彦）

図版 5



1. 平坦面6からメインレンチを見下ろす。画面中央の色相の違う部分が溝状遺構



2. 塚1西側の土塁?上よりメインレンチを見下ろす。(撮影;佐藤雅彦)



1. メイントレンチで検出された溝状遺構



2. メイントレンチの溝状遺構（完掘）。（撮影；佐藤雅彦）

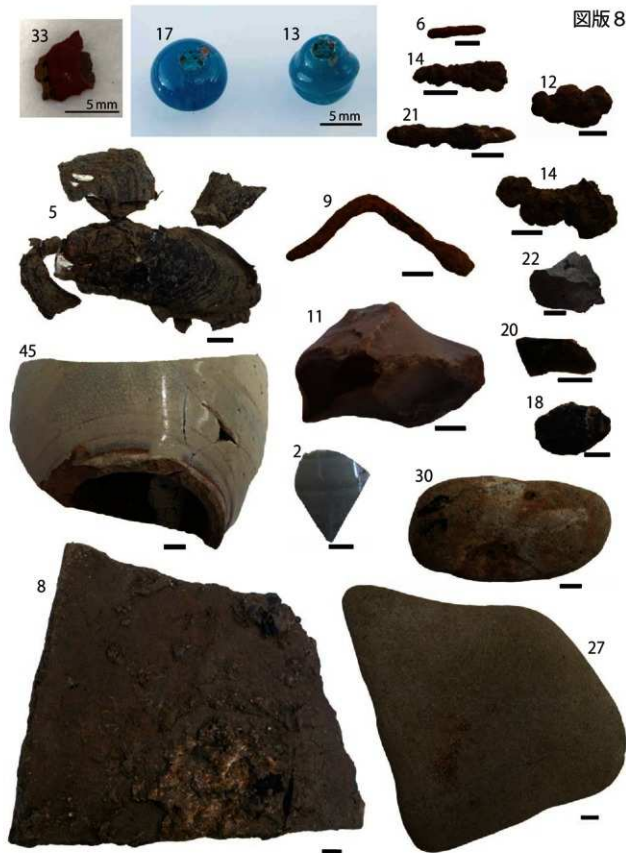
図版 7



1. メイントレンチにおける壕1の断面 (撮影; 佐藤雅彦)



2. メイントレンチにおける壕1の断面拡大. 破線; 壕の掘り方, 矢印; テフラ (撮影; 佐藤雅彦)



安部志内川右岸遺跡の出土遺物：スケールバー：1 cm 写真番号は表3の出土物番号と一致。詳細については表3参照。13、17のガラス玉は出土直後に佐藤雅彦が撮影。

表3 安部志内川右岸遺跡試掘調査出土遺物一覧
(No.1~38は遺構出土)

番号	遺物名	サイズ(mm)	遺物位置座標			備考
			X座標	Y座標	掘高	
NO.1	カワシンジュガイ殻皮	58.0×30.3×8.7	81933.56	-16332.904	21.22	
NO.2	貫芝徳利片	33.2×29.5×3.6	81931.46	-16334.812	21.35	
NO.3a	カワシンジュガイ殻皮	40.7×26.2×12.7	81930.91	-16333.013	21.32	
NO.3b	炭化材料片	長軸37.2	同上	同上	同上	
NO.4	鉄釘?	40.8×4.6×6.7	81931.22	-16334.129	21.32	
NO.5	カワシンジュガイ殻皮	最大個体縦長70	81931.13	-16333.668	21.30	5点(破片含)
NO.6	鉄釘?	24.0×4.2×4.3	81929.84	-16333.743	21.40	
NO.7	炭化材料片	長軸75	81929.88	-16334.766	21.44	
NO.8	砂岩巻伏礫	181.9×150.8×31.1	81932.25	-16332.264	21.13	
NO.9	鉄釘?	61.8×36.6×8.1	81930.44	-16335.445	21.41	
NO.10	珪化岩(火打ち石?)	27.9×26.2×6.7	81930.81	-16331.284	21.43	サンルのものと似る
NO.11	珪化岩(火打ち石?)	57.8×40.7×37.0	81930.74	-16333.606	21.16	サンルのものと似る
NO.12	コイル状?鉄製品	28.1×14.4×11.9	81932.93	-16334.967	21.33	
NO.13	ガラス玉(ひしゃげ)	7.0×5.7	81932.79	-16331.838	21.32	濃い水色
NO.14	コイル状?鉄製品	40.7×20.9×15.0	81932.17	-16331.790	21.26	
NO.15	流紋岩?片	21.3×20.2×19.2	81930.91	-16333.473	21.28	
NO.16	鉄釘?	27.7×8.9×5.8	81931.65	-16331.455	21.30	
NO.17	ガラス玉	7.9×4.4	81931.76	-16331.315	21.20	鮮やかな青
NO.18	ピッチストーン片	27.2×18.0×12.7	81931.01	-16333.470	21.34	
NO.19	石実円礫	45.2×27.2×15.3	81931.69	-16336.487	21.38	表面に錆び跡?あり
NO.20	ピッチストーン片	25.8×12.0×6.0	81932.97	-16334.392	21.31	
NO.21	鉄釘?	40.8×8.7×7.2	81931.63	-16331.755	21.31	
NO.22	流紋岩?片	31.4×27.4×16.1	81931.53	-16331.811	21.32	
NO.23	花崗閃緑岩方角礫	27.0×16.8×9.6	81929.87	-16335.066	21.42	
NO.24	砂岩積門礫	106.0×42.2×33.5	81932.22	-16332.067	21.17	ラミナが確認される
NO.25	砂岩ブレード状積門礫	134.9×61.0×38.3	81930.33	-16333.441	21.29	炭付着
NO.26	安山岩門礫	82.8×55.9×30.5	81930.53	-16333.519	21.26	
NO.27	砂岩巻伏礫	156.7×134.6×25.7	81930.67	-16333.457	21.18	
NO.28	安山岩方角礫	81.3×49.0×34.8	81930.73	-16333.241	21.26	
NO.29	砂岩方角礫	36.8×29.8×21.9	81930.92	-16333.378	21.27	
NO.30	流紋岩?積門礫	90.5×46.3×34.1	81930.96	-16333.361	21.27	炭付着
NO.31	砂岩巻角礫	67.9×43.4×26.0	81931.00	-16333.390	21.27	炭付着
NO.32	泥岩/ホルンフェルス積門礫	67.6×33.1×23.3	81931.04	-16333.349	21.23	
NO.33	赤漆腫片	6.3×5.5	81931.15	-16331.593	21.29	
NO.34a	鉄製品?	19.7×18.5×8.2	81931.74	-16332.025	21.29	
NO.34b	鉄製品?	18.8×17.8×12.7	同上	同上	同上	
NO.35	珪化岩片	37.6×30.8×12.4	81931.60	-16332.028	21.30	サンルのものと似る
NO.35	割片(珪化岩)	37.6×30.8×12.4	81931.60	-16332.028	21.30	サンルのものと似る
NO.36	砂岩巻角礫	67.9×43.4×26.0	81931.05	-16333.404	21.22	
NO.37	砂岩巻角礫	99.0×47.8×37.6	81930.62	-16333.477	21.19	
NO.38	流紋岩?片	31.4×26.1×7.9	81931.53	-16331.947	21.28	
NO.39	陶器片(皿)	40.0×32.8×12.0	6/9試掘のテストピット8出土			
NO.40	陶器土管片	59.9×51.8×12.3	6/9試掘のテストピット15出土			
NO.41	陶器片	31.0×15.7×3.8	6/9試掘のテストピット15出土			
NO.42	鉄釘?	23.1×11.5×12.3	6/9試掘のテストピット15出土			
NO.43	腫片(泥岩)	31.8×20.4×7.4	6/9試掘のテストピット15出土			
NO.44	炭化材料片	長軸約50	10/18試掘のテストピット1出土			
NO.45	貫芝徳利片	126.8×81.7	10/18試掘のテストピット4出土			遺構面より一段高い

補稿 中川町オフイチャシ跡の地質学的な地形条件について

安田 匡・右代 啓 視

はじめに

オフイチャシ跡は、平成 23 年(2011)10 月～11 月にかけ、地域の歴史的資源、地域の教育的文化資源としてアイヌ民族の文化遺産であるオフイチャシ跡についての学術的な調査を目的に地形測量調査と試掘調査を実施した。この調査のなかで、ほかのチャシ跡の立地環境と違う特徴がみられ、それは地質学的な地形条件が起因することから特筆し、次のとおり報告することとする。

1. 地形および地質

オフイチャシ跡は、中川町佐久地区の天塩川と安平志内川の合流地点付近で両河川の水衝部に挟まれた、南北に延びるやせ尾根状山地の上部における平坦箇所位置している。

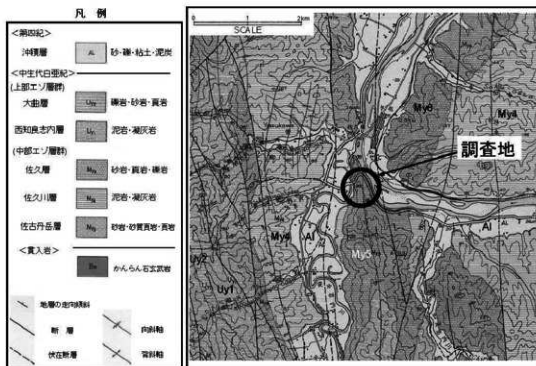


図-1. 広域地質図

オフイチサン跡が立地する基盤地質は、中生代白亜紀の中部エゾ層群佐久層の頁岩・砂岩・礫岩からなる。周辺の本層の分布域には地すべり地形が少なからず分布しており²⁾、地すべり現象が発生しやすい地質であると考えられる。尾根の中心は南北方向に向斜軸があり、東の天塩川側、西の安平志内川側のいずれにおいても地層は向斜軸に向かって、それぞれ、 $15\sim 50^\circ$ の傾斜で傾いており、尾根中心部の中に分布する地層がU字状にへこんだ形で層状に堆積している。天塩川および安平志内川流域には比高 $40\sim 60\text{m}$ および $10\sim 30\text{m}$ の二つの河岸段丘が所々存在しており、砂礫や粘土等の段丘堆積物(土層)が分布している。また、これらの河川の現河床には砂礫・粘土等の沖積層が堆積する。

図-1に広域地質図¹⁾を、また、図-2地すべり分布図²⁾を、それぞれ示した。

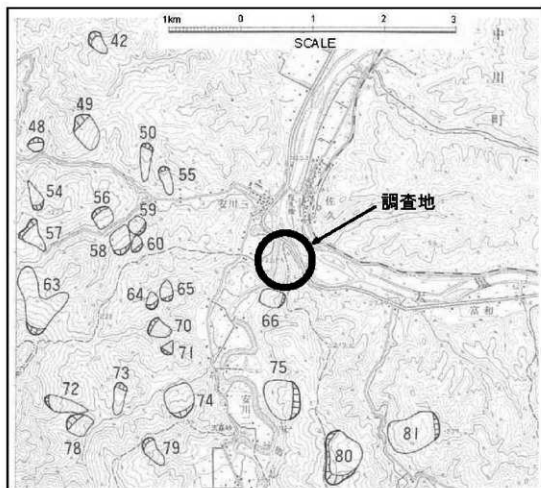


図-2. 地すべり分布図

2. オフィチャシ跡が立地する斜面の特徴

オフィチャシ跡の立地する斜面の特徴について、図-3に地すべり地形の模式図³⁾を、図-4に地すべり地形形成発達史説明図⁴⁾、それぞれ示した。また、図-5および図-6には、オフィチャシ跡周辺の地すべり分布平面図および地すべり断面図を、それぞれ示した。写真-1に斜面中腹で確認された、すべり面粘土と考えられる粘土層を示した。

図-5にみるように、オフィチャシ跡そのものが立地する平坦地形は、オフィチャシ跡が位置する斜面尾根地形の頂上近くにあつて狭小であり、段丘堆積物の証拠となる土層(例えば円礫など)が確認されなかった。また、図-6にみるように、チャシ跡跡を含む斜面は全体的に斜面の途中で、何度も滑落したような、階段状の地すべり地形をなしている(図-3および4参照)。さらに、写真-1に示すように斜面中下部には、階段状地形の末端に向かって地すべり粘土と考えられる柔らかい黄土色の粘土層を確認した。

以上のことから、オフィチャシ跡の立地する斜面は地すべり³⁾によって形成された可能性が高く、チャシ跡跡そのものは滑落崖下の陥没地形部に相当するものである⁴⁾(図-3参照)。この地すべりは図-4に示すように、地すべり地形発達史のなかの幼年期～青年期に位置づけることができる。この地すべりの運動方向は南から北に向かっており、地層が連続する方向すなわち走向方向に一致する。(図-6参照)

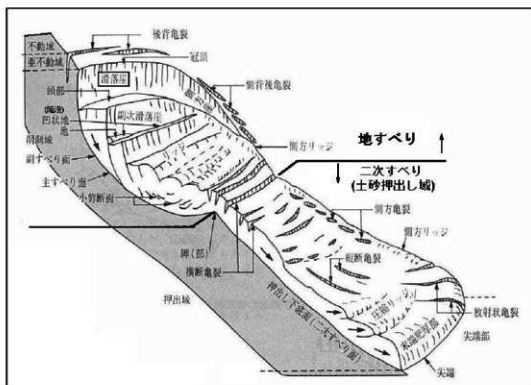


図-3. 地すべり地形模式図

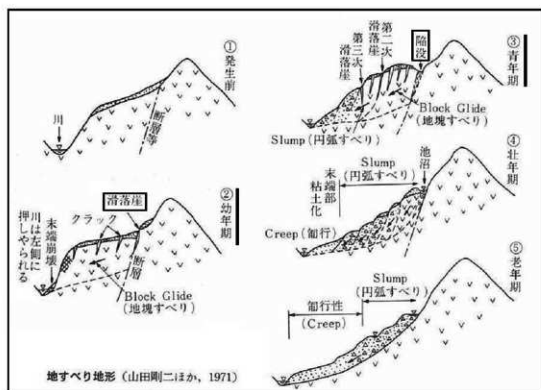


図-4. 地すべり地形発達史説明図

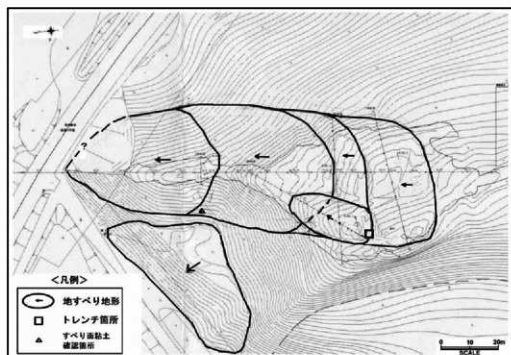


図-5. 地すべり平面図

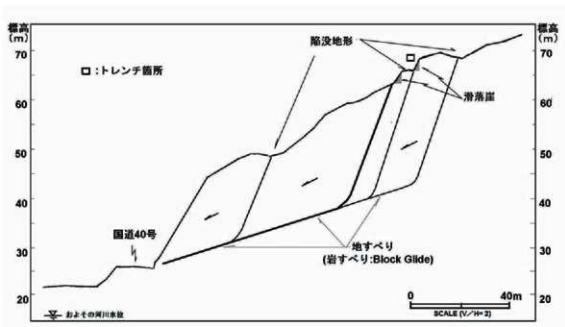


図-6. 地すべり縦断面図



写真-1. 斜面中腹で確認されたすべり面粘土 (位置は図-5 参照)

3. チャシ跡の形成時期について

図-7 にオフイチャシ跡が立地する地すべり頭部の陥没地形部に掘削されたトレンチのスケッチを示した。トレンチの位置は、図-5 に示している。

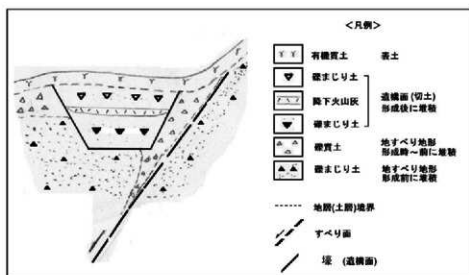


図-7. チャシ跡の壕のトレンチの地層スケッチ

図-7にみるように、チャシ跡が増築された陥没地形部においては、地すべり形成前に堆積した下の層が地すべりによって変形したのちに、変形した地層を切るように壕が構築されており、構築されたチャシ跡の壕の内の堆積物とは異なる土層に覆われている。その中にはテフラが層状に挟まれている。これらの土層を含めたすべてを覆うように表土が分布している。

時系列的には、地すべりが活動して現地形が形成された後にチャシ跡の壕が構築され、チャシ跡が使用されなくなってから火山灰が堆積し、現在に至る順序となっている。また、本チャシ跡の壕の埋土層中には、火山灰の薄層が部分的に成層しており、この火山灰は樽前山起源の Ta-a (A.D.1739) との報告がある³⁾。この火山灰はオフイチャシ跡が形成された後に堆積したものと考えられる。したがって、チャシ跡の形成は1739年より以前である。また、チャシ跡の壕の人為的な切土以降、堆積層が乱されずに残存していることから、現状の地形の形成された(陥没部が形成)時期、すなわちこの位置で地すべりによる滑落が発生した時期はチャシ跡の構築以前である。地すべりの形成時期については、時期を示す証拠がないので明確にすることは困難であるが、歴史時代より前の第四紀の比較的新しい地質時代であることは想定できる。

4 おわりに

以上の調査成果から次の項目のとおり、オフイチャシ跡の地質学的な地形条件についてのまとめとする。

- ① オフイチャシ跡は、地すべり地形(幼年期～青年期)の滑落崖下の陥没地形部に位置している。さらに、陥没によってできた線状凹地を壕としてチャシ跡の構築に利用している。
- ② 壕は地すべり発生後、旧堆積層を切って構築している。また、チャシ跡が使用されなくなってから壕内に土層が堆積している。
- ③ その中にテフラが層状に堆積し、1739年のTa-a(樽前火山灰)であることが明らかにされている。
- ④ 壕内の堆積層には乱れがないことから、チャシ跡が構築されてから現在までは、顕著な地すべり活動はなかったと判断される。変動地形でありながら、わりと安定を保っていたと考えられる。
- ⑤ 本チャシ跡は自然にできた地形をうまく利用し、展望を確保できる高さを持ち、要害的な要素を持っている。
- ⑥ 本チャシ跡の構築には、平坦地が散在する箇所として、地すべり地形、それも頭部の凹地(陥没部)が壕構築に選択されていた。

<引用文献>

- 1) 北海道立地下資源調査所, 1962: 5万分の一の地質図幅説明書天塩中川, 旭川 23, p.39.
- 2) 山岸宏光編, 1993: 北海道の地すべり地形一分布図とその解説一, 北海道大学図書刊行会, p.134.
- 3) 日本測量調査技術協会編, 1984: 空中写真による地すべり調査の実際, 鹿島出版会, p.13
- 4) 日本測量調査技術協会編, 1984: 空中写真による地すべり調査の実際, 鹿島出版会, p.27
- 5) 花岡正光, 2012: 火山灰分析. オフイチャシ跡測量・試掘調査報告書, 中川町エコミュージアムセンター, pp.10-11.

報告書抄録

ふりがな	おふいちやしあと							
書名	オフイチャシ跡							
副書名	測量・試掘調査報告書							
巻次	なし							
シリーズ名	なし							
シリーズ番号	なし							
編著者名	氏江敏文, 右代啓視, 疋田吉謙							
編集機関	中川町エコミュージアムセンター							
所在地	〒098-2626 北海道中川郡中川町字安川 28-9 電話 (01656) 8-5133							
発行年月日	西暦 2012 年 (平成 24 年) 3 月 10 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
オフイチャシ 跡	中川郡中川町国 有林 12 林班	07170	03	44 度 44 分 10 秒	142 度 2 分 37 秒	20111017 ～ 20111108	試掘調査 35 m ²	保存目的
安部志内川 右岸遺跡	中川郡中川町字 富和	07170	07	44 度 43 分 45 秒	142 度 1 分 53 秒	20110609 20111108	試掘調査 25 m ²	河川改修
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
オフイチャシ 跡	チャシ跡	アイヌ文化期 (樽前 a 火山灰 降灰以前構築)	壕	なし		地すべり地形 を利用して壕 を構築		
安部志内川右 岸遺跡	もの送り 場	アイヌ文化期 (幕末)	もの送り場	ガラス玉, 赤漆膜片				

緯度・経度は世界測地系による。

オフイチャシ跡

— 測量・試掘調査報告書 —

平成24年3月21日発行

編集・発行／中川町エコミュージアムセンター

〒098-2626 北海道中川郡中川町字安川28-9

電話 (01656) 8-5133

印刷／株式会社 国境